金大医保紀要 Vol. 22
249～252　1998

中国・北朝鮮における看護教育の実態とそれらの教育機関との交流の可能性についての視察報告

俵　友恵　長沼　理恵　林　千寿子

KEY WORDS

China, North Korea, Nursing education, Exchang programmes, Japan

はじめに

アジアの中の共産主義国である中国と朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）とは，日本の隣国でありながらこれまで疎遠であった。しかし，中国とは，近年中国の開放政策の結果として日本との交流も各方面で増大しているが，北朝鮮とは，相変わらずあまり交流がない。ところが今年秋の韓国新大統領，金大中氏の日本訪問を機会に，わが国は長年ほっ被りを決め込んできた日本の植民地支配について，国として公にかつ明瞭に謝罪をすることになったとの報道があった。これだけ遅れてしまえば「いさぎよく」とは言いにくいが，しかし，潔く謝るに越したことはない。今年は世界人権宣言50周年記念の年であるとのこと。時節にかなった行動で，大変喜ばしいことである。しかし北朝鮮とは，テポドン騒動や，以前からくすぶり続けている拉致問題やらで当分国交正常化は望めそうもない。日本の戦前戦時中の蛮行に対して当該国民として心を痛め，謝罪の糸口を見つけたいと胸を熱くしている者の一人として，民間レベルでの交流を忍耐強く続けることがその糸口をほぐす機会になると考える。そこで，看護教育に携わる者として，その方面から交流が始められないか中国と北朝鮮の看護教育機関の視察をすることにした。

視察方法

旅行方法の大枠は在日朝鮮総連合の傘下の旅行会社のグループツアーを利用し，北京での視察手配は筆者側で行い，平壌でのそれは旅行会社に委任することとしたところ，下記のようになった。

1．時期：8月16日から26日までの9日間。

2．訪問経路及び交通手段：成田→（空路）→北京（泊）→（鉄道，車中泊）→丹東（泊）→（鉄道）→新義州→（鉄道）→平城（3泊）→（空路）→北京（泊）→（空路）→成田

3．視察した医療機関及び看護教育機関

1）中国北京市内：首都医科大学看護系，首都医科大学宣武医院，北京護士学校

2）北朝鮮平壌市内：平壌産院，金萬有病院

視察内容

1．北京市内の施設訪問

これは，本保健学科看護学専攻の中国人留学生である段亜梅氏に斡旋を依頼し実現したものである。

1）首都医科大学宣武医院

首都医科大学宣武医院の副医院長である李淑迦氏にお会いした。頂いた李氏の名刺によると，中華護理学会副秘書長兼教育委員会主任であり，北京護理学会理事長でもある。名前の下には副主任護（中国式略字は才へんに戸と書く）師と印刷されていた。日本の看護婦（士）は中国では護士というが，書く時は前述したように護の中国式略字を書く。

宣武医院は首都医科大学の組織下に10ある病院の一つである。この病院の組織は院長，副院長の元に科研（Scientific Research），医療（Medical Service），医技（Medical Techniques），教学（Teaching）がある。さらに，この教学は医学一系（Faculty of Medicine No 1），生物医学工程系（Faculty of Biomedical Engineering），護理大専班（College-level Nursing Class，日本の短大レベル），護士学校（Nurses' School，日本の専門学校レベル）からなり，看護教育部門は2種類ある。このように，大きな組織の病院の副院長が看護婦である事は驚きであった。大変有能なかつ人格的にも立派な人のようであった。

金沢大学医学部保健学科看護学専攻

写真１　首都医科大学正門前にて。右から２番目より，段亜梅氏，首都医科大学宣武医院副委員長李淑迦氏，俵，長沼。

写真２　北京護士学校応接室にて。前列左端から応嵐氏，副校長の高幼帛氏。

ところで，護士は護士学校卒後５年の臨床経験をし，認定試験に合格すると護師になれるが，護理大専班卒者は２年ほどの臨床経験で認定試験が受けられるそうである。また，華らの職種別職段名分類表によれば副主任護師は大学の助教授と同等とのことである[1]。だから副院長にもなれるわけであろう。

当日の17時36分に北京を発つ夜行列車に乗車するまでの限られた時間内では，これ以上詳しい情報を入手するのは無理であった。何しろ通訳を介してのことでもあり，情報の正確さの保証は心もとない。華ら[1]の報告による中国の看護教育の仕組みはその職名が日本語化されているため，今回，筆者らが中国語のパンフレットや口頭の説明から直接収集した情報による職名とが同じなのか，最近変ったのか確認する機会がえられなかった。

２）首都医科大学看護系

残念ながら，中国は学期末で校舎は施錠されており，学生も教職員もいなかった。校舎内は廊下から講義室や実験室をドアの窓越しに覗くだけしか出来なかった。図書館は全く視察できなかったのは大変残念だった。しかし，構内はアメリカ合衆国の大学のように，木が茂り広々としていて最高学府にふさわしい佇まいであった（写真１）。学生寮，外国からの訪問教授らのための宿舎も完備しているから，次の訪問時には是非利用して欲しいとのことであった。

３）北京護士学校

前述のように，８月は学期末でここも閉校中であっ

写真３　平壌産院テレビ面会室にて。家族との面会時に使用するテレビとガイドの理学療法士。

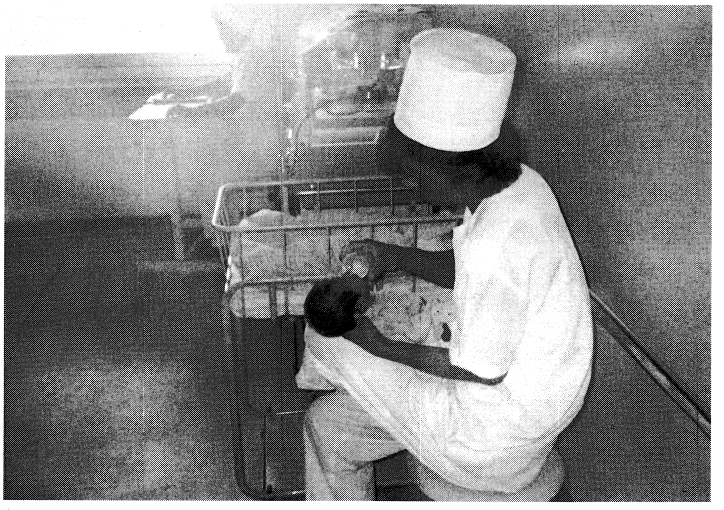

写真４　平壌産院未熟児室。

たが，中国看護協会の４部門の総責任者である応嵐氏が手配するとともに同行して下さり，副校長，学生係の職員らが休暇中にもかかわらずわざわざ出勤して親切に応対して下さった（写真２）。アメリカ合衆国カルフォルニア大学の看護教員が定期的に訪問し，教育の一端を担っているとのこと，またこの学校の卒業生は合衆国の看護婦国家試験の受験資格があるとのことであった。つまり，合衆国カルフォルニア大学側が当看護学校と密接につながり，看護教育の質の向上に努めているようである。

上述の３施設はいずれも美しいカラーの施設案内用パンフレットを発行しており，筆者らが持参した金沢大学や本保健学科の紹介用パンフレットと交換するような結果になったが，喜ばれた。

２．平壌市内の医療施設訪問

平壌訪問は在日朝鮮総連合の紹介による中外旅行社に医療施設及び看護教育機関の訪問を企画するように依頼して実現したものである。ただし，看護教育機関は視察の可能性は全くないが，平壌医科大学なら可能性があるとのことであったが，最終的には，学期末休暇で閉校になっているという理由で医療施設のみの視察となった。

１）平壌産院

ベッド数1500床（ベビー用500床＋産婦用650床＋妊婦用350床），外来利用者１日400名，年間分娩数15,000との事であった。建物は確かに非常に天井が高く，床面積も広いのではあるが，それほどの人の動きの気配は感じられないほど静かであった。家族

の面会は感染防止のためテレビ（写真３）を通してさせるのだそうである。病室も，検査室も，治療室も，未熟児室（写真４）も動線が非常に長くなってしまうのではと心配になるほど広々としすぎであった。

産院内のガイドは理学療法士だそうで，初等教育11年後医科大学で６年学び，18年の経験があるとのことであった。そうすると，40歳前後のはずだが，30歳にも届いていないようにしか見えない。通訳の間違いかもしれないとも思った。

看護教育は，各病院で行われ，11年の初等教育後２年だそうである。助産員は同じく11年の初等教育後直ちに２年の助産教育を受けるとのことであった。総婦長か看護教育担当者への面会を求めたが拒否された。持参した本学科紹介の資料は手渡しておくといわれ，そのガイドに預けるしか手はなかった。看護婦や，褥婦や新生児には会うことが出来，写真撮影も許されたので，次の病院訪問がなければもっと質問ができたと思われる。

２）金萬有病院

この病院は総合病院であり，在日朝鮮人医師が資金を出し，現在も頻繁に来訪し，心臓の手術をするとのことであった。職員の白衣は全部日本から来ているのではないかと思わせる素材であり，腰の弱い綿製の平壌産院職員の白衣は自国製ではないかと思わせる素材との格差が際立って感じられた。しかし，視察の自由は全くなく，これぞ共産主義国家かと大変に重い気持ちを抱きつつその病院を早々に引き上げた。

おわりに：９日間の旅から得たもの

今回の中国，北朝鮮視察は在日朝鮮総連合の傘下の旅行会社企画のグループツアーに参加したものであり，国際列車で陸路平壌へ入るのが目玉の北朝鮮訪問旅行であった。総勢24名で，程度の差はあったが，皆それぞれ朝鮮に対して身の不安を感じながらも，その不安を乗り越えこの旅行に参加するほどの熱い思いを朝鮮に対して持っているようであった。

丹東から平壌への道中が予定より８時間以上遅れたことを除けば，旅行は大変順調に経過し，事故もなく，全員元気に帰国できたことは喜びである。また，色々な情報が錯綜している地を自分自身の五感で体験できたことは何よりの収穫である。「百分一見に如かず」のことわざ通りで，特に北朝鮮の様相（国の統制力，国民の生活全般にわたると思われる自由の無さ）は聞きしに勝るものであった。北京，丹東の解放された市民生活，その沸き上がるようなエネルギーとは対照的で，その差が際立って感じられた。その圧迫感は，筆者らのみならず，北朝鮮を発つグループ全体の空気を重苦しいものにしていた。日本との交流の余地など全く見えない。一民間人の善意では太刀打ち出来ない国家体制の重圧をひしひしと感じ，気がめいってしまったのである。当分はこの国に解放の風は吹かないだろう。国外からの来訪者も国民も，やたらに目立つ桁はずれて大きく立派な元首の像や記念碑，手入れの行き届いた元首の巨大な立て看板の数々をまだ当分は黙々と見続けるしか策が無いように感じられた。北朝鮮入りした日の深夜の平城駅のプラットフォームで，垣間見た浮浪者のような人々の行列のことを思い出さなければ，近隣諸国のみならず国際的な食料援助を受けている国とはとても思えなかった。

以上が旅行を終えた直後の気持ちであった。しかし，数日すると，全く方策が無かったわけでは無いことに気付いた。欲張らず，施設を一つに絞り充分に時間をかけて視察をする。忍耐強く訪問し続ければ，市民レベルの小さな友好の輪が出来るのではないか。希望は持つものであることを思い出した。北京の首都医科大学宣武医院の李氏や中華護理学会の応氏との交流を保ちながら，北朝鮮の門をたたき続ける価値はあると思われる。

文　献

１）華　英　他：中国における看護教育及び病院看護の現状．金沢大学医療技術短期大学部紀要，第15巻，97－100，1991.

Nursing Education in China and North Korea, and Possibilities for Starting Nursing Exchange Programmes between Japan and these Nations.

Tawara, T., Naganuma, R., Hayasi, C.